

「寄田仰穀」考

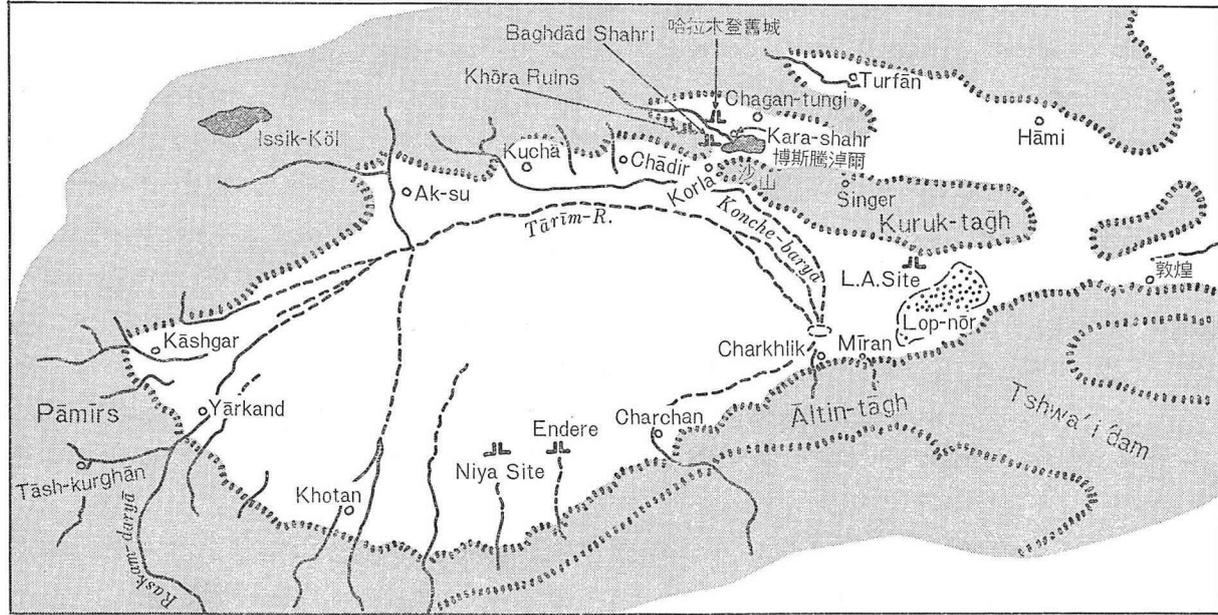
山 本 光 朗

【要約】『漢書』西域伝によると、前一世紀のタリム盆地地方では「寄田仰穀」ということが行なわれていた。この「寄田仰穀」とは、ある国が隣国の土地を借りて耕し穀物を仰ぐといった状況を指す言葉であるが、このような状況は罽賓・鄯善・山国・蒲犂・依耐といった五国に見られた。そしてこれら五国は、ほとんど盆地周辺にあつて遊牧を主たる生業とする民のいたる「国」であり、一方で少数の農耕を行う民のいたる「国」でもあった。「寄田仰穀」を行つていたのは後者の民と思われ、彼等は片道二〜九日の距離を費しタリム盆地内のオアシス国に「寄田仰穀」するため出かけて行つた。その彼等が通つた道こそ地方的に重要な道だったのであり、「寄田仰穀」関係を通して結ばれていた国々の間に「小經濟圏」を成立させていた。史林 六七卷六号 一九八四年十一月

はじめに

「寄田仰穀」とは『漢書』西域伝で二・三見られる言葉で、管見の限りでは他に用例を全く見ないものである。その最も代表的な例は、鄯善国 (To-pu-shan)^① 付近に存在していた「国」に関する「地沙鹵少田、寄田仰穀、旁国」という記事である。この記事については初唐の顔師古の註「寄於它国種田、又釋旁国之穀也。仰音牛向反」というものがあるが、「它国」の土地を借りて耕し、さらに「旁国」の穀物を買ひいれる」という解釈が一般に行われている。そしてこのような「寄田仰穀」の例は、紀元前一世紀前後のタリム盆地周辺の「国々」に於いて数例見られる。本稿はその状況を具体的に明らかにしつつ、「寄田仰穀」ということが中央アジア史上に持つ意味を考えてみようとするものである。

① 本稿では、地名の表記法は大部分 M. A. Stein, *Serindia*, 5 vols, Oxford, 1921 のそれに拠つてゐる。



タリム盆地要図（主として Stein, Serindia, vol. 5 付図による。）

(一)

『漢書』西域伝に於いて「寄田仰穀」に関する最初の国は、媯羌という「国」である。この媯羌国について同伝は左の如く記している。^①

媯羌国王号去胡来王。去陽関千八百里、去長安六千三百里、辟在西南、不当孔道。戸四百五十、口千七百五十、勝兵者五百人。西与且末接。随畜逐水草、不田作、仰鄯善・且末穀。山有鉄、自作兵、兵有弓矛服刀劔甲。西北至鄯善、乃当道云。

この記事によれば媯羌の民は田作せず、鄯善・且末(Charchan 付近にあった「国」)といった「国」の穀物に頼っていたようである。なお媯羌の民の場合、「寄田」はしていなかったことを注意すべきである。顔師古は右の「仰鄯善・且末穀」という記事について、「頼以自給也、仰音牛向反」という註をつけている。媯羌の民が穀物を仰いでいた一方の「国」鄯善国とは、当時 Lop-nor 西南の Miran・Charhlik 地区から西北部にかけて展開していた「国」であり、且末国とは現在の Charchan を中心とした所謂オアシス国家であった。ところで、ここで問題になってくるのは鄯善国のことである。なぜなら鄯善国自体が先に述べたように、「地沙鹵少田、寄田仰穀旁国」という状況で他国に穀物を出す余裕などなかった筈だからである。この点について『漢書西域伝補注』の著者徐松は、「鄯善亦仰穀旁国、此蓋由鄯善以資且末」と述べ、鄯善国を通して且末国の穀物に頼っていたのだらうとしている。^②一方松田寿男氏は、先の鄯善国の記事を Lop-nor 西北岸の楼蘭(Koraina)城の風土を写したものとし、当時「其地肥美」と言われた鄯善国内の一城伊循城(Charhlik)に位置していたとされる(付近から媯羌は穀物を仰いでいたのだらうと考えられた。^③この両氏の意見は共に傾聴すべきものを含んでいると思ふ。

ところでここでもう一つ問題となることは、媮羌の民が穀物を仰いでいた兩國までの距離である。まづ鄯善国までの距離であるが、『漢書』西域伝はこの隣合わせの兩國間の距離を全く表記していない。ただ、同伝によると陽関と鄯善間一六〇〇里、長安と鄯善間六一〇〇里であり、一方陽関と媮羌間一八〇〇里、長安と媮羌間六三〇〇里であり、そして当時陽関・長安から媮羌に行く際には必ず鄯善經由で行ったと思われるので、両里程の差二〇〇里が媮羌と鄯善間の距離となるのである。一方、媮羌から且末国までの距離は、鄯善經由で行くと鄯善と且末間が七二〇里なので、媮羌と鄯善間の二〇〇里を加えると九二〇里となる。なお先に引用した『漢書』西域伝・媮羌国条に「西与且末接」とあるので媮羌から且末に至る捷徑があったのかもしれないが、今のところ発見出来ない。このようにして媮羌と鄯善間の距離が二〇〇里、媮羌と且末間の距離が九二〇里であったとすれば、これらの里数は、すでに徐松によって指摘されているように^⑦、当時は一〇〇里が一日行程の距離と考えられていたので、それぞれ二日行程および九日行程の距離を示しているのである。それ故、媮羌の民は二日の日数をかけて鄯善国まで行き、徐松の説の如く鄯善で且末の穀を買ったというのでないなら、さらに七日の日数をかけて且末国まで行き穀物を買ったものと思われる。

さて、それではこの媮羌の「国」とはどういう国だったのであろうか。この点について次に少し詳しく見ていこうと思う。

(二)

まづ、「媮羌」という名称の持つ意味についてからである。これについては古く白鳥庫吉氏が、「媮羌」の「媮」をチベット語の tsywa (塩) の意) の音を写したものとし、「媮羌」を「塩池の羌」とされている^⑧。一方、近年佐藤長氏は、「媮羌」をチベット語の Rdsi-kyun (牧畜者の集団) の意) または Legs-kyun (鉄の集団) の意) の音を写したものと推定された^⑨。両氏の説はその当否を暫くおくとしても、後に述べるような媮羌の「国」の特徴をよく物語ったものと言えよう。

ところでこの媯羌と呼ばれた民は、『漢書』西域伝によれば、タリム盆地南方の山岳地帯に広範に存在していたようである。まづ本稿が主として扱っている「去胡来王」を戴く媯羌族がある。さらにその他にも媯羌と呼ばれる民は、且末国南方の小宛国の東方に^⑩、戎盧国の南方に、渠勒国の西方に、于闐国(Khotan)地域に存在していた^⑪南方に、そしてさらに西方、榑一雄氏によってチベット記録に現れる Nakhod に比定され、Gibe 川下流域にあったとされている難兜国の南方にも存在していたようである。^⑫榑氏は難兜国南方の媯羌について、「媯羌は本来南山の南 Tsaidam に拠ったチベット種を称するのであるが、この方面の地理に暗い漢代の支那人は、難兜国南方に媯羌に似たチベット種の居るのを知って Tsaidam の地がこの方面にまで延びていると考えたのであろう」と述べておられるが、興味深い考え方だと思ふ。いづれにしても古く白鳥氏によって指摘され、榑氏によって敷衍されたように、当時 Tshwai'dam から Kara-koram 山脈南部まで広範に媯羌と呼ばれたチベット種の民が展開していたようである。このことは三世紀頃の状況を表現していると思われる『魏略』西戎伝の次のような記事を見てもよく分る。

燉煌西域之南山中、從媯羌西至葱嶺數千里、有月氏余种葱茈羌・白馬・黃牛羌、各有酋豪、北与諸國接、不知其道里広狹。

この記事を見ると、三世紀頃の西域の「南山(はば Altin-bagh 地域を指す)」中には「葱茈羌」等と呼ばれる月氏の余种がいたことが分るのである。なおここに「月氏余种」とあるのは、前二世紀に匈奴に敗れた月氏が Bactria 方面へ逃れた際、その余种が西域の南山に残り羌種と雑居していたという情報がすでに漢代にあったからで、「葱茈羌」等が本当に月氏族であったかどうかはよく分らない。いずれにしても「葱茈羌」等と記されている以上チベット系に属する種族と考えてよく、三世紀に於いても上記の地域でのチベット種の存在を確認出来るのである。このようにして Tshwai'dam から Kara-koram にかけて広範なチベット種の存在が確認出来るわけであるが、本稿で主として扱っている去胡来王を長とする媯羌の民の場合は、その最も東方部分に位置していた集団だったのである。

それでは、この去胡来王を戴く媯羌の民は正確にはどこに位置していたのであろうか。勿論この点については、すでに

少し触れたように西域南山の東方部 Tshwai 'dam というところで諸氏の意見は一致している^⑮。ただしかし、すでに述べたように嬉羌と鄯善間の距離が二〇〇里^⑯から考へると、Tshwai 'dam ではあまりに距離があり過ぎるようになると思われる。何故なら当時 Lop-nor 西南部にあつた鄯善国から二〇〇里東南へ行つて Alin-tagh の山麓迄しか達しなかつたであろうからである^⑰。このことは恐らく、当時の漢人が鄯善方面より眺めた場合、より奥の Tshwai 'dam 迄は知り得ず、前方の Alin-tagh に向けた一部の嬉羌しか知り得なかつたであろうということによって説明されるかもしれない。それ故去胡来王を長とする嬉羌の民は、Alin-tagh から Tshwai 'dam にかけて分布してゐたと思われるのである。

ところで、去胡来王に率いられた嬉羌の民が居たこの Alin-tagh から Tshwai 'dam にかけての地域は、「辟在西南、不当孔道」^⑱と記されているにも拘らず当時ある種の重要性を持つ地域であつた。この地域にはまず、白鳥庫吉・桑原隲藏・松田寿男等各氏がすでに指摘しておられるように^⑲、Lop-nor 西南部から Tshwai 'dam を通り青海を経て中国へ入る、いわば「シルク・ロードの裏道」が通つてゐた。三氏によれば、この道は張騫も通つたし、北魏の僧宋雲・恵生がインドへ行く際にも通つたし、そして吐谷渾時代にも盛んに利用されたものだったのである。そして同時にこの道の西半分は、すでに述べたように前一世紀に於いて嬉羌の民が鄯善・且末方面へ「仰穀」しに行く道でもあつた。このようないわば地方的に重要な道が通る嬉羌地域は、「辟在西南、不当孔道」と記されているにも拘らずタリム盆地地方の歴史に重要な位置を占めていたと思われるのである。

さらに、この嬉羌地域は漢王朝にとって戦略上重要な地域でもあつた。乃ちこの地域が匈奴と結んだ時、いわゆる「河西廻廊」は閉ざされ漢王朝は対匈奴戦に於いて大きな後退を余儀なくされた。このことは、哀帝時代（紀元前七一年）に宗廟問題をめぐつて太僕の王舜と中壘校尉の劉歆が出した次のような議を見て明らかである^⑳。

孝武皇帝愍中国罷劳無安寧之時、乃遣大將軍・驃騎・伏波・樓船之屬、南滅百粵、起七郡。（中略）西伐大宛、并三十六國、結烏孫、起敦煌・酒泉・張掖、以當嬉羌、裂匈奴之右肩。

この記事によれば、武帝は敦煌・酒泉・張掖等の郡をつくり、匈奴と媯羌の連絡を断つたと言うのである。媯羌地域の重要性が分ることと思う。そしてさらに、本稿が扱っている媯羌の王が「去胡来王」と言う明らかに漢王朝から与えられたと思われる名称を持っていることから見ても、漢王朝がこの媯羌の民をいかに重視していたか分る。なお顔師古はこの「去胡来王」の名号について、「言去離胡戎来附漢也」と註している。

さて「媯羌」の名称の意味、その民の居住地、そしてその地域の重要性が以上のようなものであったとすれば次にこの媯羌の民自体についても少し詳しく触れてみようと思う。

(三)

先に引用した『漢書』西域伝・媯羌国条によれば、去胡来王を戴く媯羌の民は人口一七五〇人で、田作をしない全くの遊牧の民であった。この点では Tshwai 'dam から Kara-koran にかけての多くの「媯羌」の民とほとんど同じような生活をしていたものと思われる。しかし去胡来王を長とする媯羌の民は、別に鉄・武器の生産に従事していたようである。『漢書』西域伝・媯羌国条に「山有鉄、自作兵、兵有弓矛服刀劍甲」と記されているように。この媯羌の鉄生産については佐藤氏が、「ツァイダム北路のバガツァイダム辺から鉄を採った」のだろうと推定されている。ところでこの媯羌の鉄・武器生産と関係あるものとして、鄯善国の武器生産ということがある。『漢書』西域伝・鄯善国条に「能作兵与媯羌同」と記され、鄯善国でも媯羌と同程度の武器生産が行なわれていたと述べられているからである。すでに述べたように、媯羌の民は遊牧しつつも二〇〇里あるいは九二〇里離れた鄯善・且末といった「国」に穀物を仰いでいた。私は、媯羌の民が鄯善あるいは且末に穀物を仰ぐ際、その対価の一部として鉄・武器が鄯善あるいは且末へ引き渡されたのであり、西域伝・鄯善国条の「能作兵与媯羌同」という記事はそのような事実を反映しているのではないかと思う。

以上述べたように Altin-tagh から Tshwai 'dam にかけて分布していた去胡来王を戴く媯羌の民は、遊牧を主たる生

業としつつ鉄・武器生産も行い、一方では二〇〇里・九二〇里離れた鄯善・且末等の「国」に穀物を仰ぐ民であった。さて彼等に関する問題の最後は、史料に現れる限りでの彼等の活動時期という点である。

『漢書』趙充国伝によれば、^⑤蘭州西南に居た罕羌という種族に対する作戦の際に、宣帝が後將軍であった趙充国に与えた勅書の中に次のような一節がある。

今詔破羌將軍武賢將兵六千一百人、燉煌太守快將二千人、長水校尉富昌・酒泉侯奉世將嫫・月氏兵四千人、亡慮万二千人、齋三十日食、以七月二十二日擊罕羌、入鮮水北句廉上、去酒泉八百里、去將軍可千二百里。

この作戦は結局実施されずに終るが、この時期、すなわち『資治通鑑』によれば神爵元(前六一)年段階で「嫫(羌)」が動員されようとしているということは、当時すでに嫫羌が漢王朝に降っていたことを示している。漢王朝から与えられたと思われる「去胡来王」の名号は、遅くとも紀元前六一年には存在していたと思われるのである。去胡来王を長とする嫫羌の民に関して史料で検し得る最古の記事は紀元前六一年のものである。^⑦

一方、その最も新しい記事は、すでに引用した『魏略』西域伝のものを除けば、『漢書』西域伝に載せられている去胡来王唐兜に関するものである。^⑧左にその全文を掲げる。

又去胡来王唐兜、国比大種赤水羌、数相寇不勝、告急都護。都護但欲不以時救助、唐兜困急怨欽、東守玉門関。玉門関不内、即将妻子人民千余人亡降匈奴。匈奴受之、而遣使上書言状。是時新都侯王莽秉政、遣中郎将王昌等使匈奴告单于、西域内属、不当得受。单于謝罪、執二王以付使者。莽使中郎王萌待西域恶都奴界上逢受。单于遣使送、因請其罪。使者以聞、莽不聽、詔下会西域諸国王、陳軍斬姑句・唐兜以示之。

この事件は、去胡来王の唐兜が青海東南の赤水羌と戦って敗れ玉門関にも入れてもらえず、結局妻子人民千余人と匈奴に亡命したが、最後には同じく匈奴に亡命していた車師後王の姑句と共に漢王朝によって斬罪に処せられたというものである。『資治通鑑』によれば、^⑨この事件は元治二(紀元後二二)年のこととされる。以後、去胡来王の嫫羌に関する明確な記事

はない。

- ① 『漢書』卷九六上、婁光匈奴条。
- ② 『漢書西域伝補注』巻上。
- ③ A・ヘルマン著、松田寿男訳『樓蘭——流砂に埋もれた王都——』平凡社東洋文庫一、一九六三年。「解説」二一九ページ。なお氏はこの「解説」(二七〜二九ページ)で「寄田」について若干言及されている。
- ④ 『漢書』卷九六上、西域伝上、鄯善匈奴条。
- ⑤ ①に同じ。
- ⑥ ④に同じ。
- ⑦ 『漢書西域伝補注』巻上、且末匈奴条「南至小宛、可三日行」に対する補注。ただしそこで「掇小宛去長安里數、則且末至小宛三百九十里、是步行可三日也」とあるのは、「掇小宛去鄯善所里數、則且末至小宛三百里、是步行可三日也」とすべきで徐松は勘違いをしているように思われる。
- ⑧ 白鳥庫吉「西域史上の新研究」一九一〜一九三年、『西域史研究』上巻(岩波書店、一九四一年)所収。二五四〜二五五ページ。
- ⑨ 佐藤長「チベット歴史地理研究」岩波書店、一九七八年。三〇八〜三〇九ページ。
- ⑩ この小宛國東方に居た婁光は、その位置關係からして去胡來王を載く婁光の可能性が高い。
- ⑪ 榎一雄「難兜國に就いての考」『加藤博士還曆記念東洋史集説』(富山房、一九四一年)所収。
- ⑫ 『漢書』卷九六上、西域伝上、各國条を参照。
- ⑬ 前掲、榎。一八五ページ。
- ⑭ 前掲、白鳥。二五三〜二五八ページ。

- ⑮ ①に同じ。
- ⑯ 『三國志』卷三〇、「魏書」烏丸鮮卑東夷伝所収。
- ⑰ 『漢書』卷九六上、西域伝上、大月氏匈奴条を参照。
- ⑱ 前掲、白鳥。二五四〜二五六ページ。桑原隲蔵「張蹇の遠征」一九一五年、『桑原隲蔵全集』第三卷(岩波書店、一九六八年)所収。二九一ページ。松田寿男「吐谷渾遣使考(上)」『史學雜誌』第四八編一、一九三七年、一三九三ページ。前掲、榎、一八五ページ。佐藤長『古代チベット史研究』同朋舎、再版、一九七七年、三二七ページ。及び佐藤「チベット歴史地理研究」、三〇八〜三〇九ページ。
- ⑲ 松田寿男氏は前掲『樓蘭』「解説」の二一八ページで、「婁光はロブ地方の南側のアルティン・タグ山脈の山腹の草地に遊牧していたチベット種の遊牧民である」とされている。なお Chavannes 氏も⑯の『魏略』西域伝より婁光を Athir-gha 付近に考えておられたようである。v. E. Chavannes, Les pays occidentaux d'après Le Wei Ho, 'T'oung-pao', série II, vol. vi, 1905, pp. 526-527.
- ⑳ ①に同じ。
- ㉑ 前掲、白鳥。二五五〜二五六ページ。前掲、桑原。二九一ページ。
- ㉒ 松田「吐谷渾遣使考(上)」一三九三ページ。
- ㉓ 『漢書』卷七三、韋賢伝。
- ㉔ ①に同じ。
- ㉕ 佐藤「チベット歴史地理研究」、三〇九ページ。
- ㉖ 『漢書』卷六九、趙充國伝。
- ㉗ 平光の位置については、佐藤「チベット歴史地理研究」の「附図」第六を参照。
- ㉘ もし白鳥・桑原両氏が言われるように、張蹇が確実に婁光の地を通

ったものとすれば、『史記』卷二二三・大宛列伝の「留蔵余燾、並南山、欲從羌中燾、復為匈奴所得」という記事が燾羌に関する最古の記事となる。桑原氏によれば（張騫の遠征）二九一～二九二ページこの記事は、元朔元（前一二八）年から同二年にかけてのものである。

②⑤ ⑩に同じ。
②⑥ 『漢書』卷九六下、西域伝下、車師國条末尾。
②⑦ 佐藤『チベット歴史地理研究』三〇九ページ。
②⑧ 『資治通鑑』卷三五、元始二年条。

二 鄯善 国

(一)

鄯善国について『漢書』西域伝はおおよそ次のように述べている。^①

鄯善国、本名楼蘭、王治扞泥城、去陽闕千六百里、去長安六千一百里。戸千五百七十、口万四千一百、勝兵二千九百十二人。（中略）地、沙鹵少、田、寄田、仰穀、旁国。国出玉、多葭葦、檉柳、胡桐、白草。民随畜牧逐水草、有驢馬、多橐它。能作兵与燾羌同。（中略）鄯善当漢道衝、西通且末七百二十里。

この記事によれば、鄯善国は人口一四〇〇〇程の「国」で、土地は沙地や鹵（塩分が多い）地で小規模な耕作しか行わず、民は旁国の土地を借りて耕し穀物を仰いでいたようである。徐松はこの「寄田仰穀旁国」の記事について、「葦寄田且末」と述べ、且末国に「寄田」したのであろうと考えている。そうだとすると「西通且末七百二十里」と記されているので、且末国までは七二〇里すなわち七日間の行程だった筈で、片道七日間の日数を費して出かけて行ったことになる。この且末国については『漢書』西域伝は次のように記している。^②

且末国、王治且末城、去長安六千八百二十里。戸二百三十、口千六百一十、勝兵三百二十人。輔国侯・左右将・訳長各一人。西北至都護治所二千二百五十八里、北接尉犁、南至小宛、可三日行。有蒲陶、諸果。西通精絶二千里。

この記事によれば、Charahan付近にあった且末国は、一六〇〇人程の果物のよくとれる「国」だったようで、さらに『漢

書』西域伝・鄯善国条末尾で先ほど引用していない箇所「自且末以往、皆種五穀、土地草木、畜産作兵、略与漠同、有異乃記云」とあるので、「五穀」も作られていたようである。このように且末国は、鄯善国が「寄田仰穀」してもおかしくない「国」だったと思われる。

この中でこの「このような鄯善国の「寄田仰穀」の状況を考える際に参考となる史料がある。それは Niyā 遺址で Stein によって発見された Kharoṣṭhī 文書のうちの一枚^④、全文左の如きものである^⑤。なほ Kharoṣṭhī 文書の推定年代は、現在三〜四世紀のものである^⑥が、一般的なものである。

- (1) priyadevananusyasampujjana priyadarśanana priyabhratu cozbo lpipeya lpinusa ca
- (2) tasuca kunala sunakasa ca nammakero kareṇṭī, divyasarira arogya preṣeṇṭī bahu aneḡa, evaṃ casa
- (3) ca adehi catonena iśa visarjidesi udaga bhīśasa prace kriśivatra karaṇṇae, ahū iśa
- (4) kilamunṭra vaśidemi, eta kilamunṭrami udaga bhīśasa nanna nasti, mahante vrdhi jaṇṇa inṭhu maṇṭreṇ-
- (5) ti, cozbo lpipeyasa sacami goḥa ohara titaḡa ubati, udaga bhīśa na titaḡa ubati, yatha
- (6) devaputrasa mulade bhuma kkhāṣitra jadhaga, emeva tannu, yo atra kema hasta lekha udaga bhīśasa prace sya-
- (7) ti, athava levistarena anati lekha hakḥṣati, taha

- (1) 神々と人々に愛し崇められたる見目麗しく愛されたる兄弟、cozbo の Lpipeya と Lpinu とに
- (2) tasuca の Kunala と Sunaka とが押し出す。神の(子)を体に健かを送り出す、多く多く。かくて
- (3) そこからあなたは Catona をこしく送り出した、耕種する為の水と種子に關したことで。私はこの
- (4) 楔形の印付文書を読みました。(が)この楔形の印付文書には水と種子の名はありません。大長老達はこのように言っています
- (5) す、"cozbo の Lpipeya に対しては Sacca に於いて農場の獲得は許されざる、(が)水と種子は許されてなる"と。
- (6) 神の子(天子)の(足)下から土地が得られたようにそのように自らのものが(あるべきです)。そこに於いて水と種子に關して如何なる(手)手書文書であろう
- (7) と、あるいは細部にわたる命令文書があれば、かく調査する

margidavo, isa prahadavo, yati taha nasti bhavisyati,

(8) ademi udaga bhissasa muli prahadavo. krsivavtra isa

bhavisyati. avi ca mahante janna im-

(9) thu mantrenti, yam kala saripka isa astaga uhati,

bhuma se nikhaleti, udaga bhisa sacinci-

(10) ye nikhaletti, katna krsivavtra karenti. tena ka-

rajna tuo cindidavo.

てきでんじに送らるてきです。もしかくなら

(8) そこの水と種子の価が送らるてきです。(それすれど)この

て耕種がありましよう。また大(長老)達は

(9) このやうに言つてしまふ、「Sarpika がこの住まわられた

時には土地は彼が貸し水と種子は Saca の民が貸

(10) し、katna 達が耕種してゐる」云。それ故あなたは熟慮せね

ばなりません。

この文書は Saca (Endere 遺址付近に思はれる) に居た tasuca という官名を持つ Kunala (す Sunaka) が Nina (この文書が出た Nya 遺址に比定せられる) に居た cozbo という官名を持つ Lpipeya (この子 Lpimsu) に宛じた手紙の形式をとるものである。その内容は、鄯善王たる devaputra (「神の子」あるは「天子」の意) から gotha (T. Burrow 氏によつて “farm” と訳せられる) の使用を認められた Lpipeya が、耕種用の水 (udaga) と種子 (bhisa) を現地から徴発するため Catona という者を派遣したと云ふ、現地の mahante vidhi janna (大長老) ぐらうの意達は Lpipeya には水と種子を調達する権利は与えられていないと反対してゐる、と云ふものである。やうに、この文書の発信人 Kunala の言によれば、mahante vidhi janna 達は Sarpika という者が居た時には Sarpika が土地 (bhuma khksitra) を貸し Saca の民が水と種子を貸し katma (一種の小作する民と思はれる) 達が耕種した、とも言つてゐるやうである。この事件は恐らく、Saca の土地の使用権を認められた者は Sarpika の例の如くその土地を katma 達に貸し、その際 Saca の民が水と種子を貸すというやり方を通例としてゐたのに、Lpipeya の場合、Catona という者を派遣し Saca の民から直接水と種子を徴発しようとして起つたものであろう。この事件で興味深い点は、Lpipeya の水と種子徴発に関して反対している代表が mahante vidhi janna (大長老) と呼ばれる人々であったこと、そしてさらに王から土地の使用を認められた際には、

Sarpika の例のように土地の使用を認められた者が土地を貸し、Saca の民が水と種子を貸し Kapa 達が耕種する型式が取られていたことである。特に後者の場合、そして Lippeya の場合も、このような耕作の形式が行われていたことは、王から他地域の土地を賜与された時にそれを如何に耕すか、乃ち水や種子あるいは耕作者を如何に確保するかがかなり重要な問題であったことを示している。

このように Kharosthi 文書を見る限り、三〜四世紀の Saca に於いて一口に王から賜与された土地を耕すと言っても、それほど単純なものではなく土地の使用権、水や種子の提供者耕作者等が複雑に絡みあっていたのである。私は、前世紀に「本来」の鄯善国に於いて行われていた「寄田仰穀」の際にも、勿論 Saca の場合と較べて時代も事実関係も相違しているのではあるが、このような土地の使用権、水や種子の提供者、耕作者等の要素が非常に重要な働きをしていたのではないかと思うのである。

(二)

前節で述べたように、鄯善の民はまず「寄田仰穀」する民であった。ここではこのような民の都城であった扞泥城をめぐらる問題について触れ、あわせて「寄田仰穀」の記事が主として鄯善国のどの地域を指して記されているものか考えてみたい。

現在、扞泥城をめぐらる問題、特にその位置をめぐらる問題に関しては二つの有力な考え方があつた。一つは M. A. Stein・松田寿男の両氏をその代表とするもので、扞泥城を Lop-nor 西南部の Miran 遺址に比定する考え方である。まず Stein 氏であるが、氏は主として『水経注』に基づき扞泥城を Miran に比定する^④一方、鄯善国の旧名楼蘭との関係について次のように述べておられる。乃ち、鄯善の旧名である楼蘭は、その地 (Lop-nor 西北部のいわゆる T.A. 遺址付近) が当時漢か西域へ通じる最重要拠点だったが故に中国人によって強く意識され、それ故 Lop-nor 西南部にあつて「其地肥美」^⑤と言

われた伊循城のある Charkhlik、そして都城扞泥城のある Miran 地域までが「楼蘭 (Kharoshih 文書では Koraimma と記されている)^⑨」の名で呼ばれるようになった。しかしあくまで当時から Lop-nor 地域の政治・経済の中心地は扞泥城＝Miran・伊循城＝Charkhlik 地域だったのであり、後に（元鳳四年、前七七年）中国人が“new official designation”として「鄯善」の名をこの Miran・Charkhlik 地域に冠した時になって、ようやく「楼蘭」の名は本来の Lop-nor 西北部に戻るようになったのである^⑩、と述べておられる。氏は結局、Lop-nor 地域付近では西北部の楼蘭はむしろ「辺境」だったのであり、西南部の扞泥城＝Miran・伊循城＝Charkhlikこそが政治・経済の中心地であったと考えられたのである。そしてさらに氏は、鄯善国の「地沙鹵少田、寄田仰穀旁国」という記事について触れ、豊かではあるが塩分を含んだタリム河のたえず変る流路、それが Lop-nor に注ぐ下流域でたえず形成される三角州、そしてその付近の沼沢地などそれらの利用上の困難さをあげ、耕作可能な地域は、タリム河と Charchan 河がつくる沼沢地帯の南方で氷河の融水が利用出来る地点に限られる^⑪、と述べておられる。氏がここで耕作可能な地域として考えておられるのは Charkhlik を中心とした地域なのであり、それ故氏によれば、「地沙鹵少田、寄田仰穀旁国」の記事はタリム河下流域から南は Charkhlik＝伊循城そして Miran 扞泥城にかけての地域、すなわち氏の言われる鄯善地域を主として指したものであったのである。

一方、藤田豊八氏の研究に拠って扞泥城＝Miran とされた松田寿男氏は、この「地沙鹵少田、寄田仰穀旁国」の記事について触れ、「それならば、鄯善伝の // その土地は沙鹵で、田が少なく、旁国に寄田し穀を仰いでいる // という一節は、扞泥城の記事であるか、ないしは、珍しくも楼蘭そのものの環境を伝えた記事の残滓ではあるまいか」と述べておられる。氏の場合、元鳳四（前七七）年に楼蘭から鄯善へ国名が変更された時、都城も楼蘭城から扞泥城に移ったと考えておられるので、前後する二つの都城のうちどちらかの記事だと推定されたことになる。氏の考え方で Steib 氏のそれと決定的に違うところは、鄯善国の都城・「寄田仰穀」問題を考える際に、楼蘭地域 (Lop-nor 西北部の所謂 Taya 遗址を中心とした地域) にかんがりのウエイトを置いておられる点である。松田氏のこの楼蘭地域にウエイトを置くという考え方の延長上に、扞泥

城の位置に関するもう一方の見解である榎一雄氏の考え方がある。

榎氏は、扞泥城の「扞泥」あるいは「扞泥」の字を、Kharos̄thi 文書に現れる kuhani または khvani という語の音訳だとし、扞泥城は Lop-nor 西北部にあった所謂楼蘭遺址(L. A. 遺址のこと)そのものだったと考えられたのである。^⑧つまり氏は、元鳳四(前七七年)に楼蘭から鄯善へ国号が変更された際にも都城は移動されず、最初から一貫して Lop-nor 西部の楼蘭遺址に扞泥城に置かれていたと考えておられるのである。それ故氏の考え方によれば、「地沙鹵少田、寄田仰穀旁国」という記事は Stein 氏の場合と全く違って、Lop-nor 西部の楼蘭地域を指したものであることになる。しかしながら、榎氏のこのような考え方には二・三問題があるように思われる。すなわち氏が立論の根拠とされたのは、Kharos̄thi 文書に現れる kuhani あるいは khvani が首声上扞泥あるいは扞泥に対応し得ること、そしてその kuhani あるいは khvani が“citadel”の意味を持ち時々は「首都たる“citadel”」の意味で使われる場合もあったこと、F. W. Thomas 氏の意見があること、^⑨そしてさらに Kroraina すなわち楼蘭に王が居たことを記す Kharos̄thi 文書があること、これら三つの点である。これら三つの点は確かに各々考慮すべき問題であり、就中 kuhani あるいは khvani が扞泥または扞泥に対応し得るとされた点などは卓見というべきであり、『漢書』西域伝・鄯善国条の「王治扞泥城」という記事と分わせ考えると kuhani あるいは khvani が「首都たる“citadel”」を指して使われる場合もあったこと、Thomas 氏の説を補強するものについてはある。しかし三番目の Kroraina すなわち楼蘭に王が居たことを記す Kharos̄thi 文書があるという点については言えは、確かに Kharos̄thi 文書には Kroraina に王が居たことを示すものはあるが、しかしそこが都城であったことを示すものは無いと言わざるを得ない。それ故これら三つの点からは、扞泥あるいは扞泥=kuhani あるいは khvani=都城ということとは言えても、それイコール Kroraina すなわち楼蘭ということには必ずしも言えないように思う。そしてさらにすでに述べたように鄯善と楼蘭の距離が二〇〇里だとすれば、鄯善の都城扞泥城を Lop-nor 西部の楼蘭地域に置いたのではとつて二〇〇里で焔羌の居た Altin-tagh 方面迄達することは出来ない。私は、扞泥城を Lop-nor 西部の楼蘭

遺址とする榎氏の考え方には少し無理があるように思う。

このように見てくると、鄯善国の都城扞泥城を Miran 遺址に比定し、「地沙鹵少田、寄田仰穀旁国」の記事をタールム河下流域から Lop-nor 西南部の Charkilik・Miran にかけての所謂「鄯善地域」を指したものとす Stejn 氏の考え方が今のところ妥当と思われるのである。^⑤

(三)

前節で述べたように、鄯善の民はまずタリム河下流域から Lop-nor 西南にかけての地域で若干の耕作をし「寄田仰穀」する民であった。ところが『漢書』西域伝によると、鄯善の民は遊牧する民でもあったようなのである。「民随畜牧逐水草、有驢馬、多橐它」と記されているように^⑥。この点について Stejn 氏は、「現在（二〇世紀初め）」牧夫であり漁師でもある Loplik (Lop 地域の民) の意) と同様、前一世紀前後に於いても人口のかなりの部分はタリム河の川沿いの地帯や南方の山中で牧夫としての生計を立てていたに違いない、と述べておられる。^⑦ これは前節で述べたような Lop-nor 地域での農耕の困難さを指摘した後を受けての発言であり、説得力がある。『漢書』西域伝の「民随畜牧逐水草」という書き方からみても、Stejn 氏が言われるように、人口のかなりの部分が牧夫としての生活を送っていたと考えられるのである。その意味では、『漢書』西域伝・鄯善国条につづく「自且末以往、皆種五穀、土地草木、畜産作兵、略与漢同、有異乃記云」という記事について、「鄯善の西隣の且末(チェルチェン)およびその西に点々とつづいているオアシスでは、どこでも農耕が行なわれているという記述で、その裏には、鄯善だけはそうでなかったといわんばかりである。これは鄯善の主体がむしろ非オアシスの環境にあったことを裏付けるではないか^⑧」とされる松田氏の発言は当を得たものと言えよう。

このような言わば鄯善国に於ける遊牧性の濃厚さについては、鄯善国の前身である楼蘭国の最後の王安帰^⑨の行動を見てもよく分る。『漢書』西域伝・鄯善国条には次のように記されている。

後王又死。匈奴先聞之、遣質子（—安婦、筆者）歸、得立為王。漢遣使詔新王令入朝、天子將加厚賞。樓蘭王後妻、故、繼母也、謂王曰、先王遣兩子質、皆不還、奈何欲往朝乎。王用其計、謝使曰、新立、國未定、願待後年入見天子。

この記事は、匈奴の質子となっていた安婦が樓蘭王となった時、もと繼母で後妻となった者の意見で漢への入朝を断つたというものである。ここで注意すべきは、樓蘭王安婦の後妻がもと繼母だった者であったことである。このような風習は、たとえば『史記』匈奴列伝に「父死、妻其後母、兄弟死、皆取其妻妻之」と記されているように、当時から遊牧の民によく見られるものだったからである。この点について徐松は「樓蘭用匈奴俗」と述べているが、私はむしろ、牧夫としての生活様式がかなりのウエイトを占めていた樓蘭・鄯善地域では、当時このような風習が實際彼ら自身の風習として行われていたのではないか、少なくとも樓蘭王家ではそうだったのではないかと思うのである。

なお先に引用した『漢書』西域伝によれば、鄯善国では「有驢馬、多橐它」という状況だったようであるが、Kharosthi 文書にも驢は Khara として、馬は aspa として、橐它是 uia として多く出てきている。就中 uia は rayaka khula ⑤ 王家の橐它」等の形で頻出するものである。

以上みてきたように鄯善の民には、小規模の農耕を行い「寄田仰穀」する民と牧夫としての生活を送る民がおり、鄯善国に於いては後者がかなりの数を占めていたものと思われる。それ故鄯善の一部の民が「寄田仰穀旁国」せざるを得なかったのは、勿論「地、少田」といった自然条件に因るところが最も大と思われるが、それにもかかわらず一四一〇〇の人口を擁し、しかもその人口のかなりの部分を牧夫が占めていたということにも一因があったのではないかと考えられるのである。

① 『漢書』卷九六上、西域伝上、鄯善国条。

② 『漢書西域伝補注』卷上。

③ 『漢書』卷九六上、西域伝上、且末国条。

④ この文書の分類番号は N. iv. 139p. 69. v. M. A. Stein, *Ancient*

Khotan, Oxford, 1907, p. 395, pl. XCVI.

⑤ なまじの文書は A. M. Boyer, E. J. Rapson, and E. Senart, *Kharosthi Inscriptions discovered by Sir Aurel Stein in Chinese Turkestan*, Part I, Oxford 1920, pp. 63-64 に於て copy transcript と

れ、No. 160 の番号を付されてゐる。

⑧ 榎一雄「中央アジア・オアシス都市國家の性格」一九七一年、『シロコートの歴史から』(研文出版、一九七九年)所収。一四四～一四五のページ及び註⑨を参照。

⑨ Boyer & C., *Kharoshti Inscriptions*, pp. 5-6 に載せられてゐる Niya 遺址発見の No. 14 及び Stein 氏の分類番号は N. i. 16, N. i. 104) と述べられ、Samaka などの地名は Stein 氏の Khottana (Khotan) と訂正されてゐる。その遺跡は西ウイグル Calmadana (Charahan) → Saca → Nina (Niya 遺址) ⑩を参照) → Cad'oda → Khotana へ移つたことが Sacca 及び Calmadana (Charahan) の Nina (Niya 遺址) の間にはっきりと見られる。Endere 遺址は近辺以外には考えられない。

⑩ tasuca などの語は Stein 氏の『通説』に於ては Stein 氏の意見 (F. W. Thomas, *Some Notes on the Kharoshti Documents from Chinese Turkestan, Ala Orientalia*, vol. XIII, p. 78) を採るが、cozbo 等とは比較的低く、ラントの首など以外よく分からぬのが実状である。V. T. Burrow, *The Language of the Kharoshti Documents from Chinese Turkestan*, Cambridge, 1937, p. 94.

⑪ Stein, *Ancient Khotan*, p. 311.

⑫ Burrow 氏によれば、cozbo は一般的に高位の首長を指すとされることが、同法を徵税などの行政を担う最も活動的な首長に用いられてゐる。V. Burrow, *op. cit.*, pp. 90-91.

⑬ devaputra の語は Stein 氏の『通説』に於ては Stein 氏の意見 (cf. A. Marcq, *La grande inscription de Kaniska et l'eto-toharian, Journal Asiatique*, tome CCXVI, fascicule 4, 1928, pp. 378-383.

⑭ T. Burrow, *A Translation of the Kharoshti Documents from Chinese Turkestan*, The Royal Asiatic Society, London 1940, p. 30.

⑮ 鄯善國は前一世紀には Miran・Charkhik を中心とする「國」であったが、Kharoshti 文書が使用されてきた三～四世紀になると、その西ウイグル Calmadana (Charahan) 且末)・Saca (Endere 遺址)・Nina (Niya 遺址)・Cad'oda (精絶) 等の地域を領有するようになり、領城國家となつてゐる。

⑯ M. A. Stein, *Serindia*, Oxford, 1921, vol. I, pp. 326-327.

⑰ 『漢書』卷九十六「西域伝上」鄯善國条。

⑱ Stein, *Serindia*, vol. I, pp. 415-416.

⑲ *ibid.*, pp. 343-345.

⑳ *ibid.*, p. 335.

㉑ *cf. ibid.*, p. 318.

㉒ 松田『樓蘭』「解説」二二〇～二二一ページ。

㉓ 同前、二一九ページ。

㉔ 一方、Stein 氏は *Serindia*, vol. I, pp. 343-344 に於ては鄯善の移動を否定して居られるが、鄯善の移動はあつたと考える方がよつたであらう。

㉕ 榎一雄「鄯善の都城の位置とその移動について」『オリエント』第八卷一号、一九三五年。

㉖ F. W. Thomas, *Some Notes on the Kharoshti Documents from Chinese Turkestan, Ala Orientalia*, vol. XII, 1934, p. 61, n. 5.

㉗ ただし、㉘を参照。

㉘ ①と同。

㉙ Stein, *Serindia*, vol. I, p. 335.

㉚ 松田『樓蘭』「解説」二一九～二二〇ページ。

㉛ 『漢書』西域伝・鄯善國条には「安帰」を「善帰」に作るが、徐松『漢書西域伝補注』巻上二二〇「安帰」に改むべきであらう。

㉜ 『漢書西域伝補注』巻上。

② cf. E. J. Rapson and P. S. Noble, *Kharoshti Inscriptions discovered by Sir Aurel Stein in Chinese Turkestan*, Oxford, 1929,

Index Verborum. ③ *Ibidem*.

三 山 国

(一)

山国は、『三国志』所収の『魏略』西戎伝では「山王国」と記され、『水経注』では「墨山国」と表記されており、いずれがより正確な名称であるか明らかではない。いずれにせよ「山」ごく大まかに言って、Kuruk-tagh あるいはその西部一帯を指す)の中の「国」であつたらしいことは、その名が示すとおりである。この「国」について『漢書』西域伝は次のように記している。④

山国、王去长安七千一百七十里。戸四百五十、口五千、勝兵千人。輔国侯・左右将・左右都尉・訳長各一人。西至尉犁二百四十里、西北至焉耆百六十里、西至危須二百六十里、東南与鄯善・且末接。山出鉄、民山居、寄田、糴、穀、於焉耆・危須。

この記事によれば、山国は人口五〇〇〇人程の山中の「国」で、焉耆国や危須国の土地を借りて耕したり、そこから穀物を買ひ入れたりしていたのである。なおこの記事では「寄田、糴、穀、於焉耆・危須」となっているが、「糴」は「穀物を買ひ入れる」ことで、「寄田、仰、穀」という言い方と実質的には大差はないように思われる。

(二)

さて、この山国と、山国が「寄田糴穀」していた焉耆国・危須国との位置関係はどうなっていたのだろうか。そのことをまず述べようと思う。その為には山国の位置をもう少し正確に固定することから始めねばならない。

この山国の位置については、F. Grenard 氏が提唱し Stein 氏がより詳しく言及して以来、Lop-nor 地域から營盤を経

由して Turfan へ通じる最短路上にある Singer（または Kizil-sangir）とするのがほぼ定説となっている。この点について、後者の Stein 氏はほぼ次のように述べておられる。山国を Singer に比定することが受け入れられるならば、『漢書』西域伝・鄯善国条の「西北去都護治所千七百八十五里、至山国千三百六十五里、西北至車師千八百九十里」という記事にみられる里程は、鄯善（Trop-nor 西南地域）から山国（Singer）を経て車師（Turfan 地域）へ至る距離にほぼ合致するのである。^⑥松田寿男氏などもこの Stein 氏の説を受け入れ、山国（Singer）が車師（Turfan 地域）へ抜ける道の「要衝」であったと述べておられ、^⑦その妥当性はかなり高いものである。しかし最初に引用した『漢書』西域伝・山国条の「西北至焉耆百六十里」という記事を見ると、すなわち焉耆国（後述するように Bagdad-shahri に比定されている）まで一六〇里（約六五キロ）の距離だったとするならば、山国は Singer とはなり得ない。なぜならば Bagdad-shahri へ Singer 間はとうてい一六〇里の距離とは思われなからである。^⑧直線距離でもかなりそれを超える。焉耆国の東南一六〇里に山国があったとすれば、それは『皇輿西域図志』で比定されているように、^⑨博斯騰淖爾（Bosteng-noon）の南「一二〇里（約七〇キロ）」にあった沙山付近とするのがより妥当と思われるのである。このことは、『新疆図志』で「沙山之鉄」と沙山での鉄の産出を言い、最初に引用した『漢書』西域伝の「山出鉄」という記事との一致を述べていることによっても明らかなのである。ところで、「沙山」の名は北魏の酈道元が著した『水経注』にも見られ、「其水（『敦薨之水、筆者 又西出沙山鉄関谷』と記されている。^⑩これは、『敦薨之藪（『皇輿西域図志』の「博斯騰淖爾」あるいは Baghrash-koi とも言う）」を出た「敦薨之水（Konche-daryā のこと）」手前で通過する溪谷の難所のことを記したものである。ただしこの沙山は『皇輿西域図志』で「沙山」の西一〇〇里、「哈喇沙爾（Kara-shahr のこと）」の西南一八〇里にあったという「庫爾勒塔克（『西域同文志』で「Kurle-tak」、庫爾勒塔克と言われている山に該当する）を指していると思われる。

いずれにしても『漢書』西域伝・山国条の「西北至焉耆百六十里」という記事からは、『皇輿西域図志』の「沙山」付近が山国の位置として妥当と思われるのである。一方、先に述べたように『漢書』西域伝・鄯善国条の「西北去都護治所

千七百八十五里、至山国千三百六十五里、西北至車師千八百九十里」という記事からは、どうしてもStein氏等が言われるようにSingerが山国の候補地として妥当と思われる所が残ってしまう。これは恐らく、当時山国の民が「沙山」付近からSingerにかけて分布しており、中国人が焉耆方面より見たその西の部分が記録され、鄯善方面より見た時にはその東の部分が記録された結果だと思われるのである。

さて次に、この山国の西北一六〇里にあった焉耆国の位置であるが、これはStein氏がKara-shahr西南のBaghdad-shahr遺址を中心とする地域に比定して以来あまり問題はない。『漢書』西域伝はこの焉耆国について次のように記している。^②

焉耆国、王治員渠城、去长安七千三百里。戸四千、口三万二千一百、勝兵六千人。（中略）西南至都護治所四百里、南至尉犁百里、北与烏孫接。近海水多魚。

焉耆国は、人口三二一〇〇のタリム盆地地域では中程度の規模の「国」であったようである。なおこの記事の「海」は、先に述べた「博斯騰淖爾」＝「敦薨之藪」＝Badrash-koiのことである。

次に危須国の位置であるが、これについてはほぼ三つの考え方があつた。一つは『西域同文志』のものでKara-shahr東方の察罕通格(Cagan-tungge)に比定する考え方、二つ目は徐松の博斯騰淖爾東南に比定する考え方、三つ目はStein氏のKoriaに比定する考え方である。この三つの考え方を検討するためには、まず左に『漢書』西域伝の危須国に関する記事を引かねばならない。

危須国、王治危須城、去长安七千二百九十里。戸七百、口四千九百、勝兵二千人。擊胡侯・擊胡都尉・左右都尉・左右騎君・擊胡君・訳長、各一人。西至都護治所五百里、至焉耆百里。

この記事によれば、危須国から(西域)都護の治所烏壘城(Chadirに比定されている)に至るためにはおおよそ「西方」へ五〇〇里行けばよかつたのであり、その途中一〇〇里の所に焉耆国があつたようである。このことは、先に引用した『漢書』

西域伝・焉耆国条に「西南至都護治所四百里」とあり、危須く焉耆間の距離一〇〇里とこの焉耆く都護治所間の距離四〇〇里を足すと、ちょうど危須く都護治所間の距離として表示されている五〇〇里となるという事実によっても明らかである。つまり危須国から都護治所の烏塁城へ行くためには、危須一（二〇〇里）―焉耆一（四〇〇里）―都護治所烏塁城とおおよそ「西方」を行けばよかつたのである。その意味では、焉耆（Bakhda-shahri）よりさらに都護治所烏塁城（Chadir）に近い、Koria に危須国を比定した Stein 氏の説はまず不適当なものと言えよう。

また、『漢書』西域伝・山国条には「西至尉犁二百四十里、西北至焉耆百六十里、西至危須二百六十里」と記されており、山国〔沙山〕地域から西北へ一六〇里行けば焉耆国（Bakhda-shahri 地域）へ至り、西方へ二六〇里行けば危須国へ至つたということである。ところがこの記事も先ほどの例のように、『漢書』西域伝・危須国条によって焉耆く危須間が一〇〇里であるので、山国から危須国へ行くには必ず焉耆国を経由したことを示している。つまり『漢書』西域伝・山国条の里程表記は、山国（一六〇里）から危須国へ行く際には山国―焉耆一（二〇〇里）―危須という道筋を取っていたことを示しているのである。その意味では、危須国を博斯騰淖爾東南に比定する徐松の説も不適當と言わざるを得ない。なぜなら同じく博斯騰淖爾南方の沙山にあった山国から「博斯騰淖爾東南の」危須国へ行くのに、博斯騰淖爾西北の焉耆国へわざわざ立ち寄る筈はないからである。このように徐松の説も不適當ということになると、残るは『西域同文志』の察罕通格に比定する考え方ということになる。確かに危須国を焉耆南方の察罕通格に比定すると、山国から危須国へ行くには必ず焉耆を通らざるを得なかつたであろう。しかしながら問題はその方角である。すなわち Kara-shahr 東方の察罕通格は博斯騰淖爾の北方に位置することになり、ここに危須国を配置すると、博斯騰淖爾南方の山国から見て危須国は北の方角にあったことになる。ところが先ほど引用した『漢書』西域伝・山国条には「西至危須二百六十里」と記されており、『漢書』西域伝のこのような表現の仕方は途中どのような経路を取ろうと、ごく大まかに言つて山国の西方二六〇里に危須国があったということを示しているのであつて、山国の北方すなわち察罕通格に危須国を配置するのは不適當となるのである。

このように三説とも不適當ということになるとすれば、危須国はどこに比定したらよいのあろうか。私は Stein 氏が発見した Baghdad-shahri 西方約四〇キロ（すなわち漢代の一〇〇里）に位置する Khora 遺址^②か、あるいは黄文弼氏が発見した Baghdad-shahri 西北約六〇キロの哈拉木登旧城に危須国を比定しようと思う。この両遺址だどどちらも、都護治所烏墨城（Chadir）の東方、そして山国（「沙山」地域）の西または北西方に位置しており、それらの地域へ行く際にも必ず焉耆（Baghdad-shahri）を経由したと思われるからである。

このように危須国の位置が決定されたとするならば、危須国は焉耆国（Baghdad-shahri 地域）の西方または北西方の Khora または哈拉木登旧城附近に位置する人口四九〇〇人程度の「国」だったと考えられるのである。

(三)

以上のように三国の位置関係が定まったとすれば、沙山付近にあった山国は西北に一六〇里離れた焉耆国（Baghdad-shahri 地域）に、そしてさらにそこから西または西北に一〇〇里程離れた危須国（Khora 遺址あるいは哈拉木登旧城を中心とする地域）に「寄田羅殺」していたことになるのである。なお、この焉耆国を越えて危須国にも「寄田羅殺」していたという状況は、媯羌が鄙善そしてさらに且末に「仰殺」していた状況とどこか似ているように思われる。Stein 氏はこの山国の「寄田羅殺」について、「現在（二〇世紀初め）Kunuk-tagh によく行くモンゴル人等の場合も同じで、彼等の糧食は専ら Koria から運ばれ、Baghrash-koï が凍ると Kara-shahr から運ばれている」と述べておられる^③。氏の場合 Koria 危須国と考えておられたのでこの発言の趣旨も自ら異ったものを持っているが、いずれにしても興味深い発言である。

さてもとに戻って、この山国はどういう国であったのだろうか。一つは勿論、一六〇里・二六〇里離れた焉耆・危須へ「寄田羅殺」しに行く民のいた「国」であった。そして彼等は片道二日乃三日の日数をかけて出かけて行ったのである。さらに、前引の『漢書』西域伝によると山国は、「山出鉄、民山居」という「国」でもあった。すなわち「山（沙山）を指す

と思われる^①」で鉄を産出し、民は山中に住む^②「国」でもあった。前者について言えば、すでに述べたよう清朝時代の『新疆図志』にも「沙山之鉄」と記されているので、前一世紀に於いてこの地域の鉄産の中心地だったと思われる、そしてこの山国の鉄は、嬉羌国の例で考えたように「寄田羅殺」の対価として焉耆・危須方面へ流れていたと推定される。後者の「民山居」ということについては、沙山方面で遊牧する民もいたことを思わせる。

そしてさらにつけ加えておかねばならないことは、タリム盆地地域に於ける山国の位置の重要性ということである。すでに Stein・松田寿男両氏が指摘しておられるように、^③山国から東北へ向えば車師族のいた「Tutana」盆地に到り、東南に向えば西域交通路上の要地樓蘭へ到ることが出来た。そして西北へ行けば、焉耆そして西域都護の治所烏壘方面へも抜けることが出来たのである。このような位置にあった山国は、匈奴・車師・樓蘭・焉耆そして漢王朝といった国々の中で、戦事に於いては勿論、平和時に於いてもかなりの重要性を帯びた^④「国」だったと思われる。なお山国に関する事柄では、漢の西域都護設置以前に、匈奴の「徵稅官」たる「僮僕都尉」が、山国の民が「寄田羅殺」していた焉耆・危須方面に常駐していたという事実も注意されなければならない。

- ① 『三國志』魏志「卷三〇・烏丸鮮卑東夷伝所収の『魏略』西戎伝。
- ② 『水経注』卷二「河水二」。
- ③ 『漢書』卷九六下、西域伝下、山国条。
- ④ Dutreuil de Rhins, J. L., *Mission scientifique dans la haute Asie, 1890-1895. Deuxième partie*, Paris, 1898, p. 61.
- ⑤ Stein, *Serindia*, vol. I, p. 334, nn. 6, 7.
- ⑥ *Ibidem*.
- ⑦ 松田寿男『古代天山の歴史地理学的研究』増補版、早稲田大学出版部、一九七〇年。五八ページ。
- ⑧ Stein 氏の *Serindia* に付載されている地図による。
- ⑨ 『皇輿西域図志』卷三「山四」。
- ⑩ この地名表記は『欽定西域同文志』（東洋文庫、一九六一年）卷六・一〇aによる。
- ⑪ 勿論これは清代の里程であり、漢代のそれとは少し違う。
- ⑫ 『新疆図志』卷二九、実業二。
- ⑬ 『水経注』卷二「河水二」。
- ⑭ 『皇輿西域図志』卷三「山四」。
- ⑮ 『欽定西域同文志』卷四、二九a-a。
- ⑯ Stein, *Serindia*, vol. III, pp. 1182-1183.
- ⑰ 『漢書』卷九六下、西域伝下、焉耆國条。
- ⑱ 『欽定西域同文志』卷二「二a」。『皇輿西域図志』（卷一五、疆域八）によれば、察罕通格は哈喇沙爾 (Kara-shahr のこと) の東方「一

九五里」に在ったところ。

社、一九五八年）七二—七三参照。

① 『漢書西域伝補注』巻下。

② Stein, *Serindia*, vol. III, pp. 1230-1231, n. 2.

③ Stein, *Serindia*, vol. III, pp. 1230-1232.

④ ⑤ ⑥ 同。

⑦ 『漢書』巻九十六、西域伝下、危須国条。

⑧ Stein, *Serindia*, vol. I, p. 334, n. 7. 松田『古代天山の歴史地理学的研究』五八—六〇頁。

⑨ A. Herrmann, *Die alten Sidenstrassen zwischen China und Syrien*, Leipzig, 1910, p. 38.

⑩ Khōra 遺址に「Stein, *Serindia*, vol. III, pp. 1224-1229

を参照。

⑪ 哈拉木登旧域については、黄文弼『塔里木盆地考古記』（科学出版

四 蒲犁国、依耐国

(一)

『漢書』西域伝はこの二国についてそれぞれ次のように記している。^①

蒲犁国、王治蒲犁谷、去长安九千五百五十里。戸六百五十、口五千、勝兵二千人。東北至都護治所五千三百九十六里、東至莎車五百四十里、北至疏勒五百五十里、南与西夜・子合接、西至無雷五百四十里。侯・都尉各一人。寄田莎車。種俗与子合同。

依耐国、王治去长安方一百五十里。戸一百二十五、口六百七十、勝兵三百五十人。東北至都護治所二千七百三十里、至莎車五百四十里、至無雷五百四十里、北至疏勒六百五十里、南与子合接、俗相与同。少殺、寄田疏勒・莎車。

これらの記事によれば、人口五〇〇〇の蒲犁国は東方五四〇里の莎車国 (Karakand 地域にあった「国」) に「寄田」しており、そして人口六七〇の依耐国は北方六五〇里の疏勒国 (Kashgar 地域の「国」) 及び「東方？」五四〇里の莎車国に「寄田」していたようである。なお前者の蒲犁国の場合、後に引用する『漢書』西域伝・莎車国条には「西南至蒲犁七百四十里」と

記されているので、「東方五四〇里」は「東北七四〇里」と言いなおすべきかもしれない。いずれにしても、すでに述べたように一〇〇里を一日行程と見ると、「兩國の民は片連ほぼ五〜七日、あるいは八日の日数を費して出かけて行っていたことになる。

この蒲犁・依附二国の民が「寄田」していた莎車及び疏勒といった「国」は、それぞれ西域南道および西域北道の終着点として、そしてさらにそれぞれ西方の大月氏・安息および大宛・康居・奄蔡といった国々へ抜ける拠点として、タリム盆地西部に於ける中心地域となっていたところである。『漢書』西域伝でこれら二国の特徴を述べた記事は次のようなものである。^④

莎車国、王治莎車城、去長安九千九百五十里。戸二千三百三十九、口万六千三百七十三、勝兵三千四十九人。輔国侯・左右将・左右騎君・備西夜君各一人、都尉二人、訳長四人。東北至都護治所四千七百四十六里、西至疏勒五百六十里、西南至蒲犁七百四十里。有鉄山、出青玉。

疏勒国、王治疏勒城、去長安九千三百五十里。戸千五百一十、口万八千六百四十七、勝兵二千人。疏勒侯・擊胡侯・輔国侯・都尉・左右将・左右騎君・訳長各一人。東至都護治所二千二百一十里、南至莎車五百六十里、有市列、西当大月氏・大宛・康居道也。

これを見ると、莎車国は人口一六三七三で鉄山があり青玉を産する「国」で、一方疏勒国は人口一八六四七で「市」が列なる「国」であったことが分る。

(二)

さて、蒲犁・依附二国の民が「寄田」していた莎車・疏勒二国については以上でよいのであるが、問題はかんじんの蒲犁・依附二国の位置関係が判然としないことである。蒲犁・依附二国のおおよその位置については、Yarkand 西方の Tash-kung'han 付近というところで現在ほとんど意見が一致していると言ってよい。すなわち古く『西域同文志』^⑤が蒲犁国を Tash-

kurghan 付近の別名「塞爾勒克(Serik)」及びその西南「一五〇里」の「喀爾楚(Karcu)」に比定して以来、Chavannes 氏なども同書に拠り、蒲犁・依耐そして後漢時代依耐の別名とされた徳若といつた「国」を Tash-kurghan 地域に比定されてゐる。一方 Stein 氏は、Chavannes 氏の意見を参考にして、蒲犁・依耐二国を Zarafshan 河 (Raskam-darya) であるは Yarkand River とするの村 Asghansai・Och-beldir・Tong 付近に比定されてゐる。そして白鳥庫吉氏も、Stein 氏とはほぼ同様の地域 Raskam-darya 下流域をあげておられる。これら両氏の意見は、Yarkand 方面より見て Tash-kurghan の手前に蒲犁・依耐を配しているところに特徴がある。いずれにしても若干の相違はあるが、蒲犁・依耐二国の位置は、Tash-Kurghan 付近の溪谷と考えてよいようである。

しかしながら、この兩國の位置関係がどうなっていたかについてはあまりよく分らないというのが現状である。何故なら『漢書』西域伝は兩國を隣合わせに載せながら、兩國の位置関係を全く記していないからである。その点で唯一兩國の位置関係を示していると思われるのは、『水経注』の次のような記事である。

河水自葱嶺分源、東逕伽舍羅國。釈氏西域記曰、有國名伽舍羅逝、此國狹少、而總万国之要道、無不由。城南有水、東北流出逕浙西山、山即葱嶺也。逕岐沙谷、出谷分為二水。一水東流、逕無雷國北、治盧城、其俗与西夜子合同。又東流逕依耐國北、去無雷五百四十里、俗同子合。又東逕蒲犁國北、治蒲犁谷、北去疏勒五百五十里、俗与子合同。河水又東、逕皮山國北、治皮山城、西北去莎車三百八十里。

この記事は、白鳥氏によれば、「伽舍羅逝国(氏はこの「国」こそ Tash-kurghan だとされる)から東方へ Yarkand 河沿いの国を掲げていったものである。そしてこれを見ると、依耐国が蒲犁国の西に位置していたかみえるのである。恐らくこの『水経注』の記事は、『漢書』西域伝の国別記事が蒲犁・依耐二国の記事付近では東から西の順で掲げられている形迹があり、蒲犁国の次に依耐国の記事が来ていることによって、この『漢書』西域伝の書き方に則つて依耐国を蒲犁国の西方に、つまり上流に配置したものとと思われるのである。しかしながら、『漢書』西域伝・蒲犁国条を見ると「西至無雷五百四十

里」とあり、蒲犁国の西方にあった「国」は依附国ではなく、『水経注』で依附国の西方にあったとされる無雷国なのである。つまり『水経注』に拠れば無雷―依附―蒲犁と三国が西から東へ配置されるのに、その『水経注』が基本的に拠つたと思われる『漢書』西域伝の里程表記では、西から東へ無雷―蒲犁と配置されていて依附国は落ちてしまっているのである。それにもかかわらず『漢書』西域伝が依附国を蒲犁国の次に載せているのは、依附国が蒲犁国の西方にあったからではなく、むしろ単に依附国のすぐ近くにあったからだと思うのである。

このように『水経注』の記事が『漢書』西域伝を「誤解」して書かれたものとすれば、互いに隣接していた兩國の位置関係を決定するためには、もう一度『漢書』西域伝の記事そのものに戻らなければならない。先に引用した『漢書』西域・蒲犁国及び依附国条の記事でこれら兩國の位置関係を定めるため重要と思われる史料は、まず西域都護の治所および漢都長安までの里程を示す記事である。それによると、蒲犁王の治所蒲犁谷は「去長安九千五百五十里」・「東北至都護治所五千三百九十六里」という地点にあったのであり、依附国の治所は「去長安方一百五十里」・「東北至都護治所二千七百三十里」の地点に存在していた。この兩國の里程表記を一見すると全く別処にあった二国のように思われるが、都護治所までの里程の例で言えば、それは漢人が都護治所(Capital)からタリム盆地をいわば「左回り」に計側していった里程が依附国の数値となつて現れ、一方「右回り」に計側していったものが蒲犁国の数値となつて現れているからなのである。それ故、依附国の数値は「左回り」の一つ手前の「国」疏勒国から計側されているのであり、蒲犁国のそれは「右回り」の一つ手前の「国」莎車国から計側されていると考えられる。ところが、漢都長安までの里程は数値が誤っていない限り、兩國とも疏勒国から計側されている可能性が高い。このように蒲犁・依附二国の里程表記にはかなりの混乱が見られるのであるが、それはこの二国が、タリム盆地を「左回り」に計側した里程表記と「右回り」に計側した里程表記のいわばぶつかり合う場所だったからだと思うされる。それ故、本来隣合わせの二国だったにもかかわらず、兩國間の方向・距離すら把握出来なかったのではないだろうか。

このように考えて兩國の位置關係を決定するための史料を、今度は兩國の莎車・無雷・疏勒各国までの里程表記に求めるならば、北方の疏勒国までの距離が依耐国で一〇〇里長いという以外、他は全く同じということが分る。^⑦つまり依耐国は、単に蒲犁国の南一〇〇里にあった「国」だと思われるのである。私は、兩國は元來ほとんど一〇〇里しか隔たっていない隣国であったものが、依耐国は漢人の「左回り」の計側で捉えられ、一方蒲犁国は「右回り」の計側で捉えられた結果、兩國の位置關係自体分りにくいものとなってしまったのだと思うのである。

(三)

さて以上のように蒲犁・依耐二国のおおよその位置及び位置關係が決定されたとすれば、このような山間の溪谷から五〜八日行程の莎車(Yarkand)・疏勒(Kashgar)方面へ「寄田」することは、かなり「酷しい」ことであつたに違いない。ただしかし白鳥庫吉氏がすでに指摘しておられるように、^⑧Tash-kurghan 地域と疏勒(Kashgar)方面とのつながりはかなり古くから存在していた。氏によれば、Tash-kurghan 地域の王は二世紀前半より疏勒国の葛沙氏だったようである。^⑨紀元前一世紀前後の頃、蒲犁・依耐の民が五〜八日を費して疏勒国(Kashgar)方面へ、そして莎車国(Yarkand)方面へ「寄田」していたこともあながち不思議なことではなかったのかもしれない。

また、この Tash-Kurghan から Raskam-darya 下流域にかけての溪谷地帯で「寄田」せざるを得なかった状況をおる程度伺わせる記事が、唐代の僧玄奘の旅行記である『大唐西域記』の中にある。それは次のような一節である。^⑩

大崖東北、險嶺屢險、行二百里、至奔嶺論反讓舍羅唐言福舍。葱嶺東岡四山之中、地方百余頃、正中墜下、冬夏積雪、風寒飄勁、嘯壠鳥鹵、稼穡不滋、既無林樹、唯有細草、時雖暑熱、而多風雪、人徒纒入、雲霧已興、商侶往來、苦斯艱險。聞諸耆旧曰、昔有賈客、其徒万余、橐駝数千、賈貨逐利、遭風遇雪、人畜俱喪。時羯盤陀国有大羅漢、遙觀見之、愍其危危、欲運神通拯斯淪溺、適來至此、商人已喪。於是收諸珍宝、集其所有、構立館舍、備積資財、賈地鄰國、鑿戶辺城、以賑往來。故今行人商侶、咸蒙周給。

この記事は、羯盤陀国 (Kash-kurghan に比定されている) の東方 #五〇〇里^②にあった「奔攘舎羅 (Skt. punya-sāra)」すなわち漢訳の「福舎 (‘almshouse’)」が出来たいわれについて語ったものである。この記事で重要な点は、遭難した買客の財産でつくられた奔攘舎羅を維持するため、「買地隣国、嚮戸辺城」しているという部分である。つまり当時この地域では、「隣国」に土地を持つことがそれほど珍しくなかった、いや少なくともそうした事実の存在していたことが認められるのである。こうした「隣国」とのつながりは、「冬夏積雪、風寒飄勁、疇墮鳥鹵、稼稿不滋、既無林樹、唯有細草、時雖暑熱、而多風雪」と記された自然の酷しき、そしてその結果である農業生産の貧しさによってもある程度想定出来る。同じく Raskam-daryā 下流域付近に存在した奔攘舎羅のこのような状況は、一つの極端な例ではあるが、前一世紀の蒲鞞・依耐両国の「寄田」の状況をある程度説明し得るものだと思う。

ところでここで注意すべきことは、このように「寄田」していた蒲鞞・依耐二国が、これまで述べてきた婁婁・鄯善等の国々と同様、遊牧を王たる生業とする「国」であったらしいことである。『漢書』西域伝・西夜国条には次のような記事がある^②。

蒲鞞及依耐・無雷国、皆西夜類也。西夜与胡異、其種類羌・氐行国、随畜逐水草往来。

これを見ると、蒲鞞・依耐二国は無雷国も含めて西夜の類で、羌・氐種（ほぼチベット系民族と考えてよい）の「行国」（遊牧の「国」）であったことが分る。その意味では蒲鞞・依耐二国の民は、すでに述べた東方の婁婁の民と似た系統なのであり、Aih-tagh から Kara-koram にかけての広範なチベット系遊牧民の分布の一端を形成していたのである^②。

蒲鞞・依耐の二国、就中蒲鞞国が遊牧の「国」であったらしいことは、その王の治所の表現の仕方によっても分る。前引の『漢書』西域伝には「蒲鞞国、王治蒲鞞谷」と記されているが、嶋崎昌氏がすでに指摘されているように、^②『漢書』西域伝で王の治所を「〇〇谷」と記するのは遊牧の「国」の場合しか考えられないことなのである。それ故、蒲鞞国の民もそのかなりの部分は遊牧に従事していたものように思われるのである。一方、依耐国の場合もほとんど同様と思われる

が、ただ『漢書』西域伝・依耐国条に「少穀、寄田疏勒・莎車」とあるように、小規模ではあろうがはっきりと穀物生産の姿が見てとれる。

このように蒲犁・依耐二国は、民のかなりの部分が遊牧に従事するとともに、特に依耐国の場合、他に若干の民が穀物生産に従事している形迹が見られる「国」であった。そして両国は、その民が片道五〜八日の日数を費やして莎車国(Yar-land)・疏勒国(Kashgar)へ「寄田」しに行く「国」でもあったのである。

なお、この地域がタリム盆地地方の交通上で占める重要性については、白鳥氏がすでに指摘しておられるように、いわゆる西域南道がこの地域、そのうち特に蒲犁国を通じて大月氏・安息といった西方の国々へ続いて行ったということを言えよよいであろう。

① 『漢書』卷九六上、西域伝上、蒲犁国条。『漢書』卷九六上、西域伝上、依耐国条。

② 『漢書』西域伝の序文の次のような記事による。

自玉門・陽関出西域、有南道。從鄯善傍南山北、波河西行至莎車、為南道。南道西踰葱嶺、則出大月氏、安息。自車師前王廷隨北山、波河西行至疏勒、為北道。北道西踰葱嶺、則出大宛、康居、奄蔡焉。同右。

③ 『漢書』卷九六上、西域伝上、莎車国条。『漢書』卷九六上、西域伝上、疏勒国条。

④ 『欽定西域同文志』卷三、二七a・b、二八a・b。

⑤ 『皇輿西域圖志』卷一八・疆域一一・喀爾楚条による。

⑥ 『後漢書』卷八八・列伝卷七八・西域伝の徳若国に関する記事は左のようなものである。

徳若国、領戸百余、口六百七十、勝兵三百五十人。東至長史居三千五百三十里、去洛陽万二千一百五十里。与子合接、其俗皆同。

戸口・勝兵数から見ても、この記事が『漢書』西域伝・依耐国条を踏襲したものであることは明らかである。

⑦ E. Chavannes, Voyage de Song Yun dans l'Udyana et le Gandhara (518-522 p. c.), *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*, juillet-septembre, 1903, pp. 397-398, n. 4.

⑧ Stein, *Serindia*, p. 87.

⑨ 前掲、白鳥。一六二〜一七五ページ。

⑩ 『水経注』卷二、河水二。

⑪ 前掲、白鳥。一六四〜七〇ページ。

⑫ 『漢書』西域伝は蒲犁・依耐二国の記事の前後で、西夜・蒲犁・依耐・無雷・難兜といった順番で国別設事を掲げている。そして同伝の里程表記によれば、これらの国々はおおよそ西夜(一)―蒲犁(一五四〇里)―無雷(三四〇里)―難兜というように東から西に並んでいるのである(なお難兜国については、榎「難兜国に就いての考」一八四ページを参照)。

⑭ 『漢書』西域伝の里程表記一般については、松田『古代天山の歴史地理学的研究』五三―七六ページ、及び同『樓蘭』「解説」二二〇―二二一ページを参照。

⑮ 依耐國の都護治所までの距離すなわち都護里程は二七三〇里、そして疏勒國のそれは二二一〇里で、兩里程の差である五二〇里は兩國間の距離とされる六五〇里にほぼ近い。一方蒲鞞國の都護里程は五三九六里そして莎車國のそれは四七四六里で、兩里程の差である六五〇里は兩國間の距離とされる五四〇里乃至七四〇里のほぼ中間の数値である。これらの数値を見れば、都護里程に於いて「左回り」のそれと「右回り」のそれが明らかに違うことが分ると思う。

⑯ 依耐國の長安までの里程すなわち長安里程は一〇一五〇里、そして疏勒國のそれは九三五〇里で、兩里程の差八〇〇里は兩國間の距離とされている六五〇里に近い数値である。しかし一方蒲鞞國の長安里程九五五〇里は、莎車國の長安里程である九九五〇里より少ない数値となっている。本来長安からより遠い筈の蒲鞞國の長安里程が莎車國の

結 語

以上これまで、「寄田仰穀」ということを中心に婁羌・鄯善・山国・蒲鞞・依耐等五つの「国」の状況を見てきた。それによるとこれらの「国」の民は、鄯善のそれを除けば全てタリム盆地周辺の山間溪谷地で遊牧を主たる生業としつつ、一方でタリム盆地内のオアシス国に「寄田仰穀」していたのである。そして盆地内に居た鄯善の民の場合も、タリム河下流域や南方の Altin-tagh の山間地で遊牧する一方、且末等のオアシス国に「寄田仰穀」していたと思われる。

それでは、この「寄田仰穀」の状況と遊牧生活ということとの混在を如何に考えるべきであろうか。たとえば婁羌の民の場合について言えば、ほとんどが遊牧と鉄・武器生産に従事していたと思われ、鄯善・且末といった「国」に単に「仰

それより少ないという事は、蒲鞞國の長安里程が莎車國より測られたものではないことを示している。それ故、蒲鞞國の長安里程も、依耐國のそれのように疏勒から計測された可能性がある。なお、『漢書』西域伝の里程表記全般については稿を改めて論じつもりである。

⑰ ①に同じ。

⑱ 前掲、白鳥。一九二―一九三ページ。

⑲ 同右。

⑳ 『大唐西域記』卷二、羯盤陀國条。

㉑ Chavannes, Voyage de Song Yun, pp. 398-399, n. 3.

㉒ 『漢書』卷九六上、西域伝上、西夜國条。

㉓ 一―(二)参照。

㉔ 嶋崎昌「姑師と軍師前・後王国」一九六六年、『隋唐時代の東トウルキスタン研究』（東京大学出版会、一九七七年）所収。三二―三三ページ。

㉕ 前掲、白鳥。一七四ページ。

穀」していたということと、さして問題は無い。しかし他の四国の場合、いわば遊牧と農耕の併存が見られるのである。これは恐らく、鄯善・依耐二国の例が示すように、もともとそれらの「国」に小規模の耕作を行う民が存在していたのであり、その彼等がタリム盆地内のオアシス国に「寄田仰穀」していたものと思われる。それ故、これら四国に於いて遊牧の民が住民のかなりの部分を占めていたと思われるにも拘らず、彼等と「寄田仰穀」とは、直接的には、関係なかったと考えられるのである。

いづれにしても、これら五つの「国」の一部の民は片道二〜九日の日数を費して、タリム盆地のオアシス国へ「寄田」し「仰穀」するため出かけて行ったのである。そして彼等が通って行ったその「道」は、その地域にとって非常に重要なものであったろう。嬉羌と鄯善間の道がそのよい例であり、「辟在西南、不当孔道」と言われているにも拘らず、そこを通って嬉羌の民は「仰穀」を行い、あるいは鉄を運び出していたと思われるのである。さらに鄯善と且末間の道も、そして蒲犁と莎車間の道も、それらが「東西交通」の幹線の一部であったと言う前に、まず鄯善・蒲犁二国の民が「寄田仰穀」していた道として重要なものだったと言わなければならない。そして、このようなまず「地方的」に重要だった道が、いわゆる「国際的」な幹線を支えていたと思われるのである。

また、このような「寄田仰穀」関係を通して形成されていた地方的な道は、その道の存在によって五つの「国」のそれぞれの地域に、いわば「小経済圏」を成立させていたであろう。嬉羌・鄯善・且末がその一つであり、山国・焉耆・危須もそうであり、蒲犁・莎車そして依耐・疏勒・莎車もその一つである。少し後の三世紀の史料『魏略』西戎伝によれば、且末国は鄯善国に支配され、山王国(山国のことと思われる)そして危須国は焉耆国に、蒲犁国・依耐国そして莎車国は疏勒国に支配されていたと言う。こうした状況の一半は、この「小経済圏」の存在によって説明され得るのであり、その要因はすでに前一世紀に存在していたと言われなければならない。そしてこの「小経済圏」を主として形成していたのが、「寄田仰穀」関係だったのである。

これまで「寄田仰殺」という言葉は、たとえば部善国の例を掲げて、中央アジア地域の生産力の低さを言うために使われてきた。しかし私は、その言葉によって中央アジアに於ける地方的な道の重要性和、それによって形成されていた「小経済圏」の存在ということを指摘しておきたい。

① 『三國志』卷三〇、「魏書」烏丸鮮卑東夷伝所収。

The Settsu-Genji 摂津源氏 Family

—some phases of the military nobility—

by

Yasuo Motoki

The propose of this article is, first, to make clear the existence and chronology of the Settsu-Genji family, and next, to establish the chronological periods involved in the formation of the military nobility, pointing out properties and characteristics of each period. In dealing with these topics some attention will be given to the weaknesses of the main Settsu-Genji families: the Toda-Genji, in line of descent from Yoritsuna, which includes Yorimitsu and Yorikuni; and the Mino-Genji, who follow from Kunifusa and the families of Nakamasa and Yorimasa.

In the begining of the eleventh century these families were in the "Heika Kizoku" period. While their social status was that of military nobility, they did not often exercise their military function. However, later in the same century they linked themselves with powerful families like the In and Sekkan-ke, and regularly performed bellic tasks both for those families and otherwise. This period is called the "Kyo-musha" period. Their military strength was on a precarious foundation since they were placed in opposition to the rural loads. Later, as Taira no Kiyomori and Minamoto-no-Yoshitomo succeeded in consolidating a very wide power base from the ranks of the rural loads, the Settsu-Genji never managed to go beyond the gains made during the "Kyo-musha" period.

The Jitian Yanggu 寄田仰穀

by

Mitsuo Yamamoto

According to Hanshu Xiyu-chuan 『漢書』西域伝, they had a practice called jitian yanggu in the district of Tarim Basin in the 1st century B.

C. The term *jitian yanggu* means that people in a country live on the grain harvested in some arable land which they borrow from another country and cultivate themselves. This practice was observed in five countries: Erqiang 婁羌, Shanshan 鄯善, Shanguo 山國, Puli 蒲犁 and Yinai 依耐; almost of which were situated in the periphery of the basin. And there lived nomadic people and a minority of peasants. The latter, who seem to have practiced *jitian yanggu*, took from two to nine days to get to the countries in the basin having oases for the purpose of doing this practice.

The latter phase of the Sue Pottery 須惠器

—Excavation in Capital Heian—

by

Takao Uno

As for the Sue pottery excavated in Capital Heian (Medieval Kyoto city), which were dated the 9th-14th century, the earlier ones had various forms. But after the middle or the end of the 9th century, only the definite forms of Sue pottery were used. This change doesn't mean the decline of them, but one of phenomena that the medieval pottery style came into existence in the Five Home Provinces 畿内. At the time, the several kinds of pottery and ceramics were used each in its proper way. In that process there is the important change. On the first phase, among the various forms of them made in the producing centers the definite forms of potteries circulated. Then, on the second phase, the forms for marketing were produced on large scale in the producing centers.

In this period the Five Home Provinces developed much more as a consumer area of the ceramic goods produced in Setouchi 瀬戸内, Tokai 東海 provinces than as a producing center of the ceramic industry. It is also in this period that the system of the production-circulation-consumption of the ceramics changed on large scale and that the development of its system after the late medieval ages was based.